

第二節 上方の概況

人形劇發祥の地であつた京都は、その後名人がなくて同一曲の繰返しのみが行はれた爲に、一般から飽かれ氣味となり、慶安・承應頃は一時衰兆を呈するに至つた。『竹豊故事』上に、

京都には昔は淨瑠璃はやらす、説經與八郎歌念佛日暮林清同弟子林故林達等を翫べり

とあるのは此頃の模様を傳へたものと考へられる。

一 虎屋喜太夫

ところが淨雲の高弟虎屋源太夫及びその門人が逆に江戸から上京するに及んで、淨瑠璃は再び流行する機運に向つた。尤も既に承應には源太夫の門人伊勢島宮内が上京したことは前に述べたが、また同門の虎屋喜太夫も明暦三年に上京して、四條河原に操芝居を設けて興行し、頗る好評を博した。そして萬治元年七月受領して上總少掾藤原正信と稱した（歌舞伎事始）。その曲節は平家とも舞とも謠ともつかぬ島のもので、主として太平記を語る（東海道名所記）と評されてゐる。



(載所「雀京」) 圖の前戸木夫太喜屋虎條四京

即ち正本としては、

公平法問譯

寛文三年九月

頼政

寛文五年五月

小倉山百人一首

寛文十二年七月

清原右大將

延寶五年正月

このやうに「島のもの」(系統不明のものの意)といはれるところに、在來の京都の淨瑠璃とは違つてゐたことが窺はれる。蓋し京の從來の典雅な曲風とは餘程違つたもので、金平式の剛健な語り口と、京の曲風との中間に立つやうなものであつたらう。その語物も武勇物を主としたと同時に、軟かいものをも扱つてゐることはその正本として現存するものによつてこれを窺ひ得られる。

などを擧げ得るが、決して單なる金平淨瑠璃のみでないことは明かである。この中で殊に注目すべきは『金平法問諍』で、これは公平の荒事に謠曲『仲光』の身代の趣向を取入れて作られたもので、後の身代り戯曲の原作をなすのである。

斯くの如く伊勢島宮内及び上總少掾の力によつて、江戸の薩摩淨雲系の淨瑠璃が流行しかけたところへ、更に二人の師匠であつた虎屋源太夫が上京していよいよ盛運に向ふ事となつた。源太夫の上京は在來の説では寛文頃といふことになつてゐるが、恐らくはこれよりも前で、弟子の喜太夫と相前後して、明暦の大火を切つかけにして上つたもので、寛文年中は彼の上方に於ける活動期であつたらう。尤も源太夫が上方に於ける消息は明かではないが、彼がこの地を開拓するに及んで、その門下から名人が輩出して、京阪にはここに古淨瑠璃の全盛時代を現出するのである。而してその門人として特筆すべきは井上播磨掾と山本土佐掾とである。

二 井 上 播 磨 掾

井上播磨掾は京都の人で、通稱を市郎兵衛といひ、大内の御簾製作の職人であつたが、生來音樂の才があり、音聲逞しくして謠の素養もあつたので、虎屋源太夫の門に入つて淨瑠璃を學

び、工夫修練の功を積み、江戸萬歳の曲節を聞いて悟るところがあり、茲に一流を語り出したといはれる（操年代記）
竹豊故事）。

受領の年月は明かではないが、既に明暦四年頃から井上大和少掾藤原貞則と稱へて居り、寛文の末にしばらく勝則と名乗つたこともあつたが、延寶に及んで井上播磨掾藤原要榮と名乗つたので、始めから播磨掾といつたのではないといふことを、現存の正本を基礎として水谷氏は『繪入淨瑠璃史』で論じて居る。されば『今昔操年代記』に、初め井上大和掾藤原要榮と名のり、後、大和を改め井上播磨掾といつたとある記事には少し錯誤がある事となる。それは左に示す正本も亦これを立證して居る。即ち、

紅 葉 狩 天下一大和少掾藤原貞則 明暦四年初秋刊

くらま 文あらひ 天下一井上大和掾藤原貞則 萬治二年九月刊
がくれ

鎮西八郎爲朝 天下一大和少掾藤原勝則 寛文十年二月刊

日本王代記 井上播磨掾藤原要榮 延寶二年正月刊

とかう四變して居る。故に明暦四年廿七歳の時既に大和少掾藤原貞則と名のり、寛文末年に貞則を勝則と改め、更に延寶初年に井上播磨掾藤原要榮と改稱したといふことになる。井上播磨

掾は淨瑠璃史上に於ては頗る重要な位置を占める一人であるが、その中でも第一に注意すべきは、大阪の道頓堀に操芝居を設立して大阪に於ける人形劇の中興の祖となつた事である。大阪の人形芝居に關しては既に前章に述べたやうに、寛永期は殆んど言ふに足らず、漸く明暦頃になつて、伊藤出羽掾の名代で道頓堀に操芝居が設けられ、それが丁度明暦の大火の難を避けた江戸の淨瑠璃太夫等が來て出勤し、また京に虎屋源太夫等が下つて盛行を見るに及んで漸く擡頭しかけ、寛文に及んで頗る盛んになつたことは出羽掾の正本として刊行された左記の諸篇がこれを示して居る。

天狗羽打 てんぐはづ 天下一出羽掾藤原信勝正本 萬治三年三月刊

綱金時最後 同 寛文元年閏八月

四天王最後 同 同年九月

頼光蜘蛛切 同 同二年正月

あさひな 島渡り 同 同年六月

金時洛陽入 同 同四年正月

そのすべてが金平淨瑠璃である事は外題を一見しても明かである。のみならず出羽掾は操芝

居の名代であつて、その座附の名高い太夫は無かつたから振はなかつた。然るに寛文初年に播磨掾が一度この地に櫓をあげるに及んで、その妙技は大好評を博して、爲に大阪に淨瑠璃愛好熱が俄に高まり、以後五十年ならずして大阪は操芝居の覇府となるに至つた。これ一に播磨の力といふも過言ではあるまい。故に『操年代記』は播磨掾を以て大阪に於ける淨瑠璃太夫の祖師とまで言つてゐる。播磨は貞享二年の夏、京四條の芝居に招かれて上京し、『頼光跡目論』を興行して大好評を博したが、中途にして病を得て、この地に歿した。時に五十四歳であつた。播磨の正本としては『外題年鑑』にも約六十篇の多數を擧げてあるが、これに漏れた現存の正本も相應にあるから、その總數は恐らくは八十篇以上無慮百篇に及ぶかも知れない。三十年前後の藝歴として、古淨瑠璃時代にこれだけ多數の作を櫓にかけて語つたのは偉とすべきである。比較的古い時代の明かなものを左に列記して參考に供する。

紅葉

狩

天下一大和少掾
藤原貞則正本

明暦四年初秋日

に たんの 四郎

萬治二年正月

くらま
がくれ 文 あらひ天下一井上大和
掾藤原貞則

同年九月

道 風 額 一 揃

同

同年十月

石橋山合戰

天下一大和少掾
藤原貞則

同四年四月

賴義金剛山合戰

同

寛文三年正月

菅原親王

寛文三年正月

今川物語

天下一大和少掾
藤原貞則

寛文三年五月

書物賣仁田四郎

(にたん四郎の再版)

寛文七年五月

源平敵討の遺恨

寛文八年九月

鎮西八郎爲朝

天下一大和少掾
藤原勝則正本

同十年二月

西國卅三番順禮記

井上大和

同十年

たむら將軍

同十一年

花山院后諍

寛文十三(延寶元)年正月

日本王代記

井上播磨掾藤原
要榮

延寶二年正月

賴光跡目論

(寛文末か
再版延寶五年正月)

忍四季揃

天下一播磨少(上下)
掾藤原要榮(二卷)

延寶二年刊?

第一 日本王代記

羽子板の由來
照日前忍びの段

第二 十二段 御曹司忍びの段

第三 業平河内通

第四

雷論 義家景久痴話物語 第五 跡目論 鹽釜 第六 紅葉狩 鹽釜 第七 小さらし 宇治の名

所づくし 第八 仁田の四郎 書物賣 第九 一條合戰 (以上忍びの段名所づくし) 第十 十二段

第十一 熱田合戰 第十二 源平軍論 第十三 鬼若丸 第十四 太子傳記 第十五 菅原

の親王 四季の立花 第十六 四季のらん曲 第十七 役の行者花賣 第十八 花物狂 第十九

禪師坊會我 第二十 生捕問答 第二十一 金剛山合戰 第二十二 石山落月見 (以上四季揃)

四天王筑紫ぜめ

延寶五年正月

閣殿上女袖鑑

延寶五年

三浦軍法比

同年十一月

賴朝七騎落

賢女手習鑑

以上は刊行年代の明かなものであるが、これによつても刊行の年々盛であつた事がわかる。殊に延寶から天和頃には多かつたらうが、判明しないのは残念である。その中には近松の青年時代の筆に成るものも混在して居る。『天鼓』『花山院后諍』『賴朝七騎落』の如きはそれであり、その他にも『大友眞鳥』『荏柄平太』『甲賀三郎』『田村將軍初觀音』『賴義北國落』『大會我』

『賢女手習鑑』『日向景清』等の中にも近松の青年期の作がありはせぬかといつて問題とされて居るものである。

播磨の語物中에서도殊に評判がよくて、大阪の人々が好んで稽古したのは、

掛物揃 (頼義北國落)

歌仙の段 (菅原親王)

宮島八景 (源氏筑紫合戦)

鹽釜の段 (頼光跡目論)

馬の段 (同上)

屏風八景 (金剛山合戦)

清明神おろし (花山院后諍)

七夕祭 (導軍法競)

五天竺 (日本王代記)

長生殿四季 (源氏熱田合戦)

等その他数多いと、『操年代記』に見えて居る。併しその文はいづれも古風で拙劣なものが多く、

道行の如きも名所方角など前後矛盾し、文脈も亂れた糸のやうである。併し一度これが播磨の口から語り出されると、その文章上の缺陷は消え去つて、聽者を恍惚たらしめたといふ。

然らば播磨の曲風如何といふに、その正本について見ても京都の上總少掾と同じく、當時の上方に於ける硬派の代表者であつたことは明かで、その師源太夫及び當時西下した江戸の金平流の特徴を與へて居た事は明かであるけれども、決して純然たる金平の祖述者ではなかつた。

その一篇の道行景物盡しの如き敍景や抒情の分子に富んで文に華を飾り、場面を語り生かす節事を重んじたと共に愁歎を巧みにし、濡事もよくしたらしい。それは『操年代記』に「フシ・オクリ・三重・オン・フシオクリ・ハルギン此類に心をくばり、就中うれひ、修羅を第一に語られ」たと言つて居るのによつてもそれを證し得られる。斯くの如く剛と柔、勇壯と悲哀、修羅とうれひとを淨瑠璃の二大根幹として新機軸を立てて、剛の中によく柔を生かした播磨節を大成して、やがて來るべき新國民音樂の大成者たる元祖義太夫の先驅者として、近世淨瑠璃の大切な役目を果たしたといふべきで、播磨の淨瑠璃史上に於ける功績は永く忘るべからざるものであると思ふ。

その門弟としては井上市郎太夫と清水理兵衛とが名高く、前者の正本としては、『源氏十五

段』『五大力菩薩』があり、後者に、『待宵物語』『源氏東の門出』『上東門院』『松浦五郎旅日記』等がある。而してこの清水理兵衛の門から初代竹本義太夫が出るのである。又、元祿年間に道具屋節を語り出した道具屋吉左衛門も播磨の流れを汲んだもので、その正本として『外題年鑑』には『四天王雷論』『筑紫問答』『金平地獄破』『鎮西八郎』『三原合戦』をあげてある。

三 山本土佐掾——角太夫節

井上播磨と同門から出て、全く別の曲風を樹てて、後に影響を及したのは山本土佐掾である。彼は大阪の人で、京に出て虎屋源太夫に學び、初め山本角太夫と稱へて一流を語り出し、角太夫節と持囃された。一説に、角太夫は伊藤出羽の弟子ともいふが、彼が大阪の出身で、しかもその作に操からくりを利用する仕組の多いのによつて見れば、當時からくりで名高かつた出羽の芝居に縁故があつたと考へてよいと思ふ。又、伊勢島宮内の弟子であるとの説もあるが、源太夫よりは柔婉の致に富んだ曲風と思はれるその樂風を取入れたことも肯定される、假令直接の弟子ではなかつたとしても、かくして、京都では寛文末には金平節も既に飽かれてゐた際であつたところへ、丁度その土地の人々の要求するやうな曲風を語り出したので、頗る歡迎され

たのである。延寶五年十二月受領して山本相模掾藤原吉勝といひ〔聲曲類纂〕にこの年土佐掾と受領したとあるは誤、のち貞享頃に至つて土佐掾と改稱したやうである。土佐掾は播磨掾よりは稍後輩で、延寶から元祿初年頃までを中心として活動したらしいが、歿年は明かでない。正徳三年の『四條河原芝居名代帳』に「去辰年相果」と見えて居るが、これは元祿十三辰年か正徳二辰年かは他に傍證が無い限りは判定に苦しむが、恐らくは元祿十三年であらうか。その正本としては、次のやうなものがある。

酒 吞 童 子 山本角太夫正本 延寶四年八月

瀧口横笛紅葉遊覽 同 同年十二月

七 小 町 同 延寶五年八月

牛若辨慶島渡 同 刊年未詳

頼朝三島詣 天下相模掾藤原吉勝 延寶六年正月

信 太 妻 同 同年二月

善 光 寺 同 同年三月

清水寺開帳 同 天和二年

辨財天利生物語 同

天和二年正月

弘法大師御誕生記

相模掾正本

天和頃

鞍馬山初寅詣 同

同

五大力菩薩 同

同

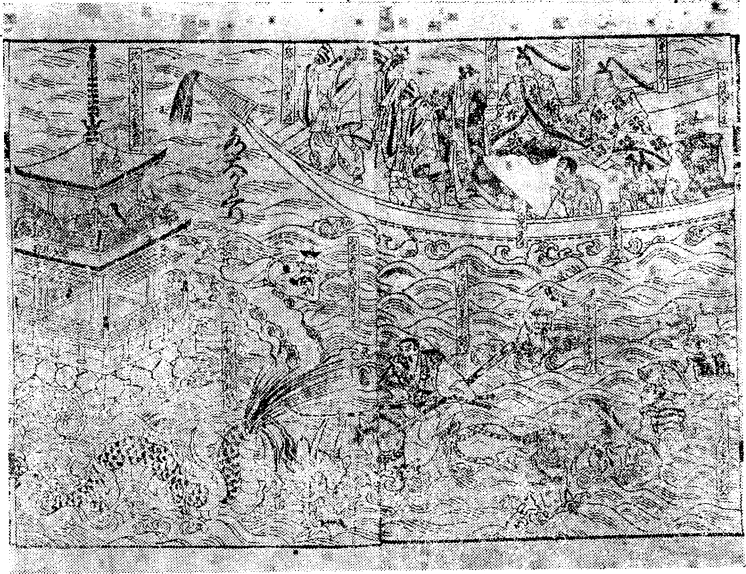
等を始めとして、この外『外題年鑑』に掲げたものも四十篇近くある。その中には『愛護若』『王昭君』『都志王丸』『信田小太郎』『小栗判官』『石堂丸』といふやうな説教の系統に屬するものや、『天親菩薩』『傳教大師記』『女人往生記』『西教寺七萬日回向』『因幡堂開帳』『四十八願記』『日蓮上人德行記』『善光寺』『天王寺彼岸中日』などの如き、靈驗記・緣起物・高僧傳乃至開帳當込といふやうな、佛教的作品が大部分を占めて居つて、武勇物は極めて少い。信州善光寺如來が、京都または大阪へ出開帳の節は、必ず角太夫の芝居がその邊で興行されたといふ(攝陽奇觀)のは、左もあるべき事のやうに思はれる。その文章は大抵典雅流麗であつて、古淨瑠璃としては文學的價值に富む事に於て蓋し他に類が尠いやうである。そのうち、『瀧口横笛』『源氏烏帽子折』『門出八島』などは、近松の青年期の作として定評のあるものであり、『善光寺』『信田小太郎』『信太妻』なども注目すべき佳作である。斯様な次第で土佐掾の正本にはその材

題や趣向の上に於て後の戯曲の原據となつたのや、又は影響を及ぼしたものが尠くはない。既に土佐掾の正本に斯くの如く説教式のもの、佛教的のもの、又は人情物の多いのによつても、その語り口はほぼ想像に難くなく、恐らくは典雅哀婉で、しんみりとして嚙みしめて味ふやうな曲風であつたであらう。自然、彼の井上播磨の如く音聲逞しくして甲乙相整ひ、藝を以て聽衆を魅了するといふ程に、藝の幅が廣い天才ではなかつたらしいが、上方に於ける軟派の一巨頭であつたことは明かである。而して彼は南京系操を用ゐて、舞臺技巧の方面に工夫を凝らし、觀客の興味を惹くことに力を致して、京都に於けるからくり派の頭目であつたらしい。『竹豊故事』に、「南京系操は寛文、延寶の頃より遣ひ始めし由、京都山本角太夫座に専ら遣ひしなり」とあるのはこれを證して居る。

山本土佐掾の門人として松本治太夫と都太夫一中とが名高い。

四 松本治太夫——治太夫節

このうち治太夫は初名を菅野傳彌といひ、貞享頃一流を開いて、世に治太夫節と稱へられた。その正本に、『高砂』『小夜中山』『石川五右衛門』『鎌倉袖日記』『八島合戦』『源氏白旗由來』



松本治太夫正本「大伽藍寶鏡」挿畫

『清水利生物語』『大伽藍寶物鏡』等がある。曲風は傳はらぬが、正本によつて見れば、師の土佐掾と同じく軟派を得意とし、しかもやはりからくりその他舞臺技巧にも相應苦心したやうであるが、作品の材題・内容等に於ては、特に取出して言ふ程の事もないやうである。

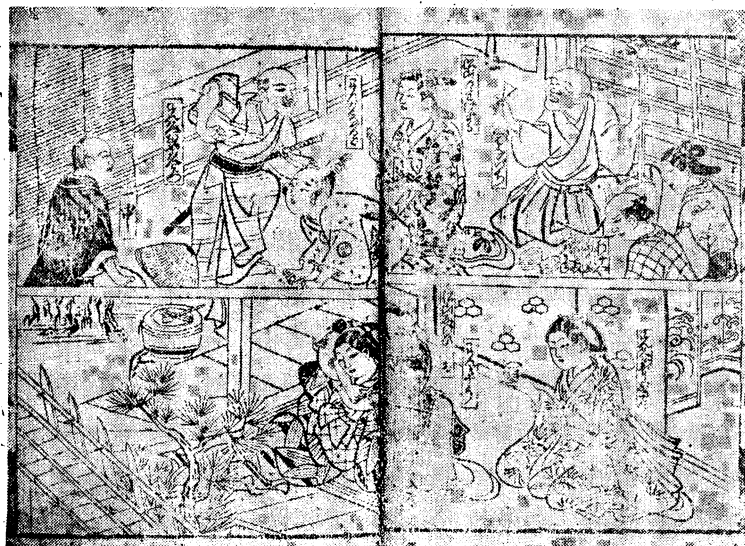
五 都一中——一中節

都一中は京都本願寺派の明福寺の第三代目の住職周意の二男で、惠俊といつて最初僧侶であつた。そして兄周閑が早世したので、明福寺の五代目の住職となつたが、還俗して山本土佐掾の門に入つて淨瑠璃を學

び、遂に淨瑠璃を以て世を送ることを決心して藝名を須賀千朴といひ、のち都一中と改めた。明福寺の過去帳には次のやうに見えてゐる。

享保九年五月十四日歿、法名周可（前名惠俊）都太夫一中、性音曲を好み、品行正良ならずして寺を繼ぐを欲せず、還俗して船頭町に別居す。

とある。これによれば、當時の文藝壇の他の偉人と同じく、傳統の殻を破つて新藝術の爲に身を捧げた、一個の天才であつたと謂つて差支へないと思ふ。その曲風は土佐掾の特徴をいよいよ發揮して典雅哀婉であり、また一面に於て古雅掬すべき風趣をも保持して居つた。その正本を見るに、心中物・世話物の多



都 一 中 正 本 「 桃 久 末 松 山 」 挿 畫

いのも、曲風の特色と時世の影響とによるものと見るべきであらう。即ちその正本としては左の諸種がある。

助 六 心 中

けいせい内房成（助六後日心中）、佐渡島二郎左衛門作

椀久末松山

菜種の花盛（あづま與次兵衛）

辛 崎 浪 枕（辛崎心中）

彦三近江八景（古今彦三）

おしゅん川原心中
傳兵衛

八百屋お七

傾城大和繪姿三幅對（愛染明王影向松）

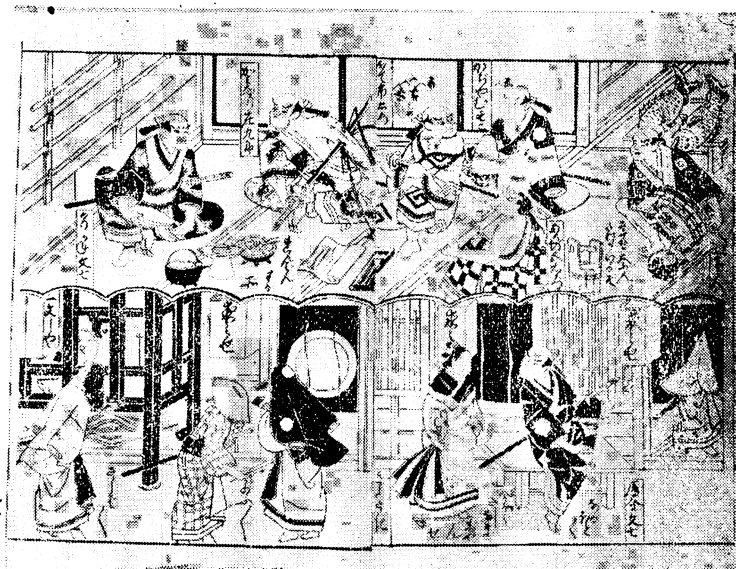
傳 授 小 町

その外一段物も多いが、これは例へば『お夏清十郎笠物狂ひ』『山崎與次兵衛狂亂道行』『梅川忠兵衛道行』『四天王大江山道行』といふやうに、近松の作品から取つたもの、又は『子の日

の松しのめ道行』『自然居士二位前道行』の如き初代義太夫の語物、又は『平安城若葉の前道行』『八千代玉垣なほしの前道行』の如き宇治の語物の詞章を轉用したものが多い。操用のものではなくて、座敷淨瑠璃・肴淨瑠璃である。これを集めたのが享保版の『都羽二重拍子扇』二冊で、この中に五十段を収載されて居る。この一中の門から出た都半仲事宮古路國太夫も亦、時代の生んだ音曲の一天才であつたが、彼は享保末に江戸に下つて所謂豊後三流の祖となり、かくして同流派は歌舞伎劇の方面に入つて、ここに江戸の劇場音楽として榮える事となるのである。

六 岡本文彌——文彌節

文彌節の祖岡本文彌は、山本土佐掾の門人であるといはれて居るが、早く既に延寶に名を成して居るのによつて考へると、同輩であつたと見る方がよいやうである。文彌が活動の根據は、大阪の伊藤出羽掾座であつたのによると、土佐掾がまだ在大阪時代に、共に藝道を修業し、文彌は止り、土佐掾は京都へ出て名を成したものとと思はれる。文彌の語り出した文彌節は、延寶年中には既に大阪には頗る流行したと見えて、延寶七年刊行の『難波雀』に延寶の頃名高き



圖本正文彌本「雁金文七秋の霜」挿畫

「町淨瑠璃」として、播磨風に六人、二郎兵衛風に二人、本出羽風に一人、道化に五人を擧げてゐるのに對して、文彌風としては、

ときは町たばこや三右衛門 南谷町かせ

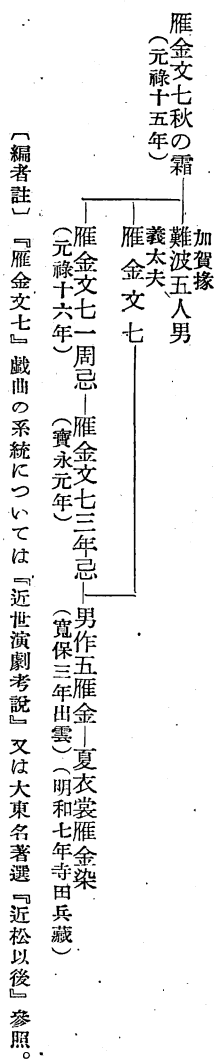
や吉兵衛 彌兵衛町八百屋三右衛門 八

郎兵衛 おかた市兵衛 北谷町小間物屋

九郎三郎 北谷町 權四郎

以上七人を擧げてある。即ち播磨風よりは多いのであつて、これによつてもその頃の大阪に於ける同流の人氣を推察し得べく、一時非常に流行したものであつた。その曲風は井上播磨の剛柔兼ね具へたのに對して、京都山本土佐掾のやうに、哀婉なる軟派の特徴を殊に發揮したものと見えて、文彌の

泣き節とも稱へられた程である。その正本として『外題年鑑』には、『山桝太夫』『戀塚物語』『照天姫操車』『卅三間堂棟由來』『曇鸞大師御傳記』『源恕上人記』『四十八願記』等二十餘段を掲げてある。そのうち『雁金文七秋の霜』は元祿十五年八月十六日所刊の雁金文七等五人男を材題として語つた短篇の世話物で、同年九月九日から興行された。世に世話淨瑠璃の嚆矢といはれる近松の『曾根崎心中』に先立つこと一年であつて、五人男の戯曲の原作をなすものである。



文彌は元祿七年正月六十二歳で歿したといふ(名人忌辰録)。元祿十三四年頃の刊行と思はれる錦文流の作で伊藤出羽掾座上場の『國仙野手柄日記』に、同座の淨瑠璃太夫として岡本今文彌の名が見えて居り、又、刊年未詳の『源平太平記』にも、同じく上るり今文彌、からくり山本彌三

五郎とあるのによれば、この人が文彌の後繼者として、文彌の名によつて出羽の芝居に居つたものと思はれる。その他『聲曲類纂』は小林平太夫・岡本鳴渡太夫・廣太夫・利太夫等を文彌の門人として擧げてゐる。併し文彌節は元祿に入つては、義太夫に壓せられて振はなくなつたものらしく、『男色比翼鳥』(寶永四年刊 奥村正信か)には、「文彌節も古めかし」と見えて居り、いつの間にかその樂流は京阪には絶えて、ただ義太夫・一中・豊後節などの中に「文彌」といふ節付を残すのみとなつた。然るに不思議にも、佐渡にはこの文彌節が今日まで語り傳へられてゐて、その曲風は、勿論多分語りなまられて居らうが、相應に古體を保存するものと思はれる。それを聞いて見れば、哀調を帯びてはゐるが、相應強い莊重な味もあつて、義太夫の未成品といふ感じがする。

文彌節の流れに阿波太夫の愁ひ節がある。出羽掾座の阿波太夫『聲曲類纂』には鳴渡太夫と同人とある。)の得意とした曲風で、文彌の泣き節の特徴を、一層極端に發揮したものであつた。江島屋其積の『世間娘容氣』(享保元年)には、極めて哀れなことが好きの長堀材木屋の娘は、少い時から日暮太夫の歌説經を聞いてたまたまなくあはれがり、それより出羽の芝居の阿波太夫の愁ひ節に打込んで、『四十八願記』の三段目を覺えて、一人慰みに語つては泪をこぼし、延の紙を一日

に二束づつ費つて、ふだんに目を泣きはらして居たといふ。勿論作者の筆から生れた娘であるが、阿波太夫のウレヒ節が、感傷的の町家の娘などに受けた例とするには差支へないであらう。表具屋節または又四郎節といはれる一派を語り出した表具又四郎も亦文彌の門人であつた。但し播磨風を加味し、その節付も上品であつたといふ。『木曾義仲』『難波八景』『草紙洗小町』『忠臣兵揃』等がその正本として年鑑に見えてゐる。